

『ミッション・マンガル 一崖っぷちチームの火星打上げ計画』

監督：ジャガン・シャクティ

脚本：R・パールキ

出演：アクシャイ・クマール、ヴィディヤ・バラン、タープスィー・パン
ヌー、ソーナークシー・シンハー、キールティ・クルハーリーほか

2019年/インド/130分



公式サイト

DVD 発売中

発売元：アット エンタテインメント

販売元：TC エンタテインメント

©2019 FOX STAR STUDIOS A DIVISION OF STAR
INDIA PRIVATE LIMITED AND CAPE OF GOOD
FILMS LLP, ALL RIGHTS RESERVED.

社会を旅する シネマ

きっともっと 近くなる
きっともっと 知りたくなる

理系出身の私の母は「料理は科学」が口癖だった。野菜を塩でもむと水が出るのは浸透圧。ジャムのふたが開かないときは、温めると空気が膨張して開きやすくなる。教科書で理論だけを学ぶより、暮らしから学べば楽しく、記憶にも残りやすい。本作もそんな暮らしの可能性をみせてくれる。

タラは主婦であり母であり、インド宇宙研究機関(ISRO)で働くひとり。しかし、重大なロケットの打上げで小さな確認ミスにより失敗を招いてしまう。タラと責任者のラケーシュは、誰もが実現不可能だと考える「火星探査機打上げプロジェクト」に左遷されることに。予算はかなり少額。準備期間も通常の半分以下。せめて経験豊富なメンバーを望むも、配属されたのは経験が浅い女性や、モチベーションが低い男性など「二軍」の職員ばかり。最初はバラバラだったチーム。しかし、ラケーシュとタラが「できない」の思考を捨てて取り組むよう呼びかけるうち、ユニークなアイデアが次々と生まれ、結束力も高まり、ついに探査機打上げが実現へ。

実は本作、インドが2014年にアジアで初めて、かつ、ハリウッド映画よりはるかに安い予算で、火星の周回軌道に探査機を到達させた実話に着想を得ている。本作の監督はISROで働く姉がいたことから、この火星プロジェクトに携わった「知られざるヒーロー・ヒロインたち」に光を当てたいと考えた。登場人物や具体的なストーリーはフィクションだが、



壮大な宇宙プロジェクトも 暮らしの中の学びと つながっている

アーヤ藍

それでも考えさせられるものがある。非常に難解に思える宇宙プロジェクトと、日常生活の知恵を結びつけて描いているからだ。

たとえば、月よりはるかに遠い火星へ探査機を送るには、燃料を節約しなければならない。タラはプーリー（インドの薄焼き揚げパン）を揚げるときに、鍋の油が一度、充分熱せられたら火を消してもしばらく揚げ続けられることに着想を得て、探査機が地球の軌道を周っている間はエンジンを切ることで燃料を節約すればいいと考えつく。本作ではこのように登場人物たちが研究室の外の日常生活から重要なアイデアをひらめいていく。宇宙に関する専門用語を並べても観客に伝わらないため、中核となるプロセスを、日常的なものを例にしてわかりやすく伝えようと監督が考えたのだという。

実際、日々の暮らしの中から学ぶことは多くあるはずだ。むしろ机上の勉強だけでは「不可能」とされてきたことに対して、新たな視点や発想をもつには、自分を取り巻く幅広い世界から学びとる姿勢が大切ではないだろうか。日本のイノベーションを生み出す力が低迷しているとよく聞く。対策として巨額の資金や人的資源も割かれているが、より多くの人が家事をはじめとした暮らしの担い手となれば、自ずと思考の柔軟性が増して、ひらめき力もアップするのではないだろうか。その方がずっと「節約」もできるはずだ。

アーヤあい：映画探検家。1990年生。慶應義塾大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことをきっかけに、社会問題をテーマにした映画の配給宣伝を行うユニテッドピープル(株)に入社。同社取締役副社長も務める。2018年独立、映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。

